
きらめきクインテット！（仮）

すいかちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きらめきクインテット！（仮）

【Nコード】

N9896L

【作者名】

すいかちゃん

【あらすじ】

大学でオーケストラ部に入ったものの、いつも皆に頼りないと言われてしまうチューバ吹きの良い。

そんな彼は、ある日突然、同級生から音楽隊に誘われる。

ちっちゃなトランペット吹き、ちあ。

皮肉屋のクラリネット吹き、直規。

モデルみたいなサックス吹き、奈美さん。

悪友でトロンボーン吹きの、陽平。

彼らの仲間になった良は、アンサンブルの楽しさに癒され、仲間とともに成長していく。

そして、最後に彼らを待ち受けているものは……

プロローグ（前書き）

私の小説にしては、珍しく前向きです
皆さま、安心してお楽しみくださいませ
レッツ プレイ インストウルメンタル！

プロローグ

公園は、そこだけがまるで別世界みたいに、シーンと静まり返っていた。

とは言っても、こんなにぽかぽかした日曜日の昼間から、誰もいないってわけじゃない。

公園にいる人は、ほとんど僕ら五人の周りに、扇状に座っている。

家族連れ、学生カップル、おじいちゃんおばあちゃん。沢山の人々が、僕らの周りを囲んでいた。

皆、今日の公演のお客さんとして、集まってくれているんだ。

そう、僕ら『きらめき音楽隊』の、最後の演奏会を聴きに。

こうやって、お客さんが作ってくれる、期待を込めた静寂っていうのは、僕ら演奏者にとって心地よく、ほどよいプレッシャーに感じられる。

自然と、この人たちのためにいい演奏をしなきゃって思ってしまった。
うんだ。

僕ら、5人の仲間。『きらめき音楽隊』は、最後の準備に入っていた。

うつすらと目に涙をためて、精一杯背伸びし、トランペットを構えたあちゃん。

愛用のクラリネットの角度を、何度も、何度も確かめている直規君。

奈美さんは、いつものようにハイヒールの片足に重心を乗せて、かつこよくアルトサクスを咥えている。こんな日でも、自然体だ。かと思うと逆に、いつもは頼れる存在であるトロンボーンの陽平が、今日ばかりは、頼っぺたをこわばらせて、少し緊張しているようだ。その気持ちは痛いほど分かる。

そして僕。皆の中で一番頼りないって言われる良。これで、5人

組の音楽隊が完成する。

僕は、体に巻きつく白いコブラのような、大きなラッパを支えながら、しっかりと立っていた。

この楽器の名前はスーザフォン。直径１メートルもある大きな朝顔を持ち、一番低くて一番大きな音が出る。音楽隊にとって、縁の下の力持ちだ。

この３か月間、ずっと苦楽を共にしてきたこの楽器。大好きな楽器。

しかし、僕がこの楽器を吹けるのも、今日が最後だ。

僕らにとって、今年最後の、そして一生、次はこないかもしれない合奏が、今始まるうとしている。

ちあちゃんが、皆の目を見回した。彼女の合図が、始めの一拍目になる。そうしたら、公演が始まる。曲が始まる。もう二度と戻ってこない時間が始まってしまふ。

だからこそ……僕は後悔したくない。

後悔なんか絶対しないんだ。

みんなの視線がちあちゃんに集まる。ちあちゃんが楽器を少し持ち上げて下ろす。その動作に合わせて全員が肺いっぱい息を吸い込み。

高らかなファンファーレが、青空に抜けた。

プロローグ（後書き）

この作品はフィクションです

モデルなんていませんからね

1 (前書き)

こういう時代が
私にもありました

「えっ、新しいサークル？」

僕は、学食のざるそばを口に運ぶ手を止めて、陽平の顔を見直した。

「そう……ハフ、ハフツ。ちっちゃい音楽隊とか面白そうだろ？」

陽平は、普段から好物だと言いふらしてやまないカツカレーを口いっぱい頬張って、咀嚼しながら説明してくれた。

彼は、スポーツが得意で、いつも友達と構内をはしゃぎまわっているタイプの人だ。

背が高くよく日に焼けて、引き締まった身体は新陳代謝が活発そうだ。

そのためだろうか、たまに一緒に食事をする、このように豪快な食べっぷりを見せてくれる。

思わずこちらの空腹も忘れて見入ってしまいそうだ。

「そんな、新しい音楽隊って言ったって、僕はもうオケ部に入っちゃったんだし」

僕は、箸を置きながら口ごもった。

「お前、オーケストラなんか始めてたのかあ」

陽平は素っ頓狂な声を上げる。

「あんなの、俺ら金管はうるさがられて、合奏でもほっとかれるだけじゃなか。お前のパート、ひどい時は一曲に一か所しか出番が無いって聞いたぞ。正直楽しいかあ？ おっと、フーフー……ハフツ」

彼はひととき大きなカツに、フォークをザクリと突き刺して、冷ましてから口に運ぶ。揚げたてのカツからはそれでも湯気が立ち上っており、火傷しやしないか心配になる。それにしても、よく胸やけの心配をせずに食べられるものだ。

「……うん、まあ、そうなんだけど」

快活な彼の誘いに対して、僕は即答できずにうつむいた。

覗き込んだお椀の中では、さつきからつけられっぱなしの蕎麦が、たっぷりおつゆを吸って茶色くなってきている。

正直な話、彼の言葉は、僕の心中を十中八九あてていたのだ。

僕は、中学の時から、吹奏楽部でチューバという楽器を吹いている。

チューバ？ 聞きなれない方もいるかもしれない。

ここで少し、チューバを知らない方のために、チューバってというのがどんな楽器なのか、説明する時間を取らせてほしい。もし「そんなの常識だい！」って思う方がいるなら、こんな眠くなる説明なんて読み飛ばして、下の会話文のところまで行ってくれても、べつにかまわない。

チューバの見た目を一言で表すと、「でっかいかたつむり型のラッパ」だ。難しい言葉で言つと、オーケストラや吹奏楽のような楽団の、最低音部を担当する金管楽器である。

「金」管楽器というだけあって、真鍮という金属の上につるつるのメッキをかけているから、大抵、金ピカか、銀ピカのボディをしている。

トランペットやトロンボーンのように、カップ型のマウスピースの中で、唇をぶるぶるふるわせて音を出す楽器、すなわち金管楽器の中で、一番大きいのがチューバ。

もし君が、どこかで吹奏楽の演奏を聴く機会があったなら、手前から右の奥の端っこの方に注目してみてほしい。

大抵、座高よりも高い大きなベルをゆらゆらさせながら、一生懸命低音を吹くチューバ吹きくん（もしくは、さん）を見つけることが出来るはずだ。

チューバ吹きの役目というのは、大抵、低音としてリズムを刻むこと。そして、和音、つまりハーモニーの基礎になる事。

バンドの皆をまとめるためには、打楽器の次に重要なパートだ。でも、だからこそ。

華やかなメロディなんか、めったに回ってくることはない。ずっと表打ちの四分音符か、長い間伸ばしているか。そのどちらかだ。

その作業は、肺活量と、基礎体力があればあるほど楽になる。

正直、男にしては体格の小さな、どちらもないやせ気味の僕には、少し荷が重くもあつた。

「ほら、高三の夏さ、良が吹きたがつてた曲あつたじゃん。ああいうの、少しはやらせてもらえてるのか？」

気のいいかつての同級生は、僕の方を、心配そうにのぞきこんでくる。

またしても僕はうつむくしかない。

答えはノーだった。

中学の時も、高校に入っても、吹く曲といったら、単調なマーチか、拍子もよくわからない現代音楽ばかりだった。

僕の所に回ってくるのは、楽譜が読めなくても、聞き覚えで何とかなってしまうような簡単なパートばかりで、折角練習しても、地味な仕事だから目立てないな、と少し残念に思っていた。

そんな僕を変えてしまったのは、高校二年生の時、先輩から卒業記念にと渡されたCDだ。

先輩はフランケンシュタインのように大柄な男性だったが、楽器の扱いが巧く、非常に繊細な演奏の仕方をする人だった。

「さ、参考になると思うからさ、良君も聞いてみたらどうかな…

…？」

そう、不器用そうに彼ははにかんだ。

小遣いとバイト代で少しずつ買い貯めたいろいろなCDから、より抜きで集めたのだというその音源は、いずれもワグナーという人が作曲したものばかりだった。

先輩の丸文字で書かれた目録には、一流のオーケストラ団と、「フルキューレの騎行」とか、「ニルンベルクのマイスタージンガー前奏曲」とかみたいなの、長ったらしく、仰々しい名前ばかりが並んでいて、最初はとっつきにくいと思ったものだ。

でも、実際にCDを聞いてみて、その感想は180度向きを変えることになる。

ああ、この曲は知ってる！ この曲のこころで、よく聞いたらチューバだったんだ！！

聞きたびに、5年も付き合ってきた楽器が、次々と新しい側面を見せてくれるようになったのだ。

例えるなら、いつもは話しかけても、ぶすつと黙ってる女の子がある日いきなり、笑顔を見せて、話しかけてくれたような気分。

今すぐ飛び出して行きたくなるほど勇ましい曲、輝かしく芳醇な曲。

ワグナーの作ったオーケストラ曲では、いつもチューバが、メロディラインの一番いいところにいた。

その場の空気ごと、轟々と震えて雄たけびを上げるような音があったと思えば、繊細なアルト歌手のように包み込んでくれる音もある。

それらの音源をヘッドホンをで聞くと、僕は背筋がぞくぞくと震えて、恍惚とした、少しいけないような気持ちになったものだった。先輩の刷り込みは功を奏し、僕はあつという間にチューバとワグナーの虜になっていた。

体格が小さかろうが、肺活量が無かろうが関係ない。絶対この旋律を吹いてやるという気になり、俄然練習に身が入ろうというものだった。

去年、つまり、高校を卒業する年にも、僕らはコンクールに出場した。

部員皆で自由曲を選曲する際に、僕は狂ったように件の「ワルキユーレの騎行」を推薦した。

いつもおとなしくしている僕が、いきなり強硬な姿勢に出たのだから、部員は、特に女の子たちは相当驚いていたようだ。

当時の僕はどうかやら、やり方を間違えていたらしい。

いつの間にか何となく、良君は大会で自分が目立ちたいがために

言っているんだな、という雰囲気になった。四分音符しか吹けないチューバのくせに、生意気じゃない？ という雰囲気だ。

その評価こそ当時の僕としては心外だった。なにせ、練習の甲斐あって、とても速いパッセージこそ苦手だったものの、そこらへんにいる、喋ってばかりのフルートの女の子たちよりも、ずっと早く連符を吹けるようになっていたからだ。

しかしその事で調子に乗ったのがよくなかった。僕は大人げない男というレッテルを貼られてしまった。

結局僕の要求は、50人近い部員の仲間たちに聞き入れられることはなかった。

かくして、僕らは高校最後の年に、ネリベルの「交響的断章」という、これまたよくわからない現代音楽で大会に出場し、県大会の銀賞をもらって帰って来た。

部への影響力が強いOB講師の選曲だったから、文句も言えなかった。

当時の仲間の大部分とは、それでさようならである。

かろうじて、目の前の陽平と、女子を仕切っていた、ピッコロの芹沢さんが僕と同じ大学に来ていたくらいだ。

そう言えば僕がオケ部に入ったのも、芹沢さんの熱心な誘いを断れなかったせいだった。

芹沢さんはチューバが足りないからと、僕を一生懸命に誘ってきた。彼女は甘えたような声を出すのが大好きで、その声で頼まれると僕は弱い。

『ねえ、一緒にオーケストラ部にはいるおよオ。大学なんだし、ワグナーでもなんでも吹けるよオ、きつと』

鼻にかかったような芹沢さんの言葉や態度も、ワグナーの名前を間違えて覚えていた事も、今でも鮮明に思い出せるのだが、彼女を前にすると、なぜか怒る気が失せてしまう。

そついうのが得意な女性は、天性の才能という奴を持っているに違いない。

結局、彼女のいいなりにサークルを選び、中高時代よりもっと出番の減った楽譜を与えられながら、僕は、ぼんやりと楽器を抱えて座りっぱなしの大学生活を始めることになったのである。

そうして、一月半の時間が流れた。季節は6月。じめじめとした生ぬるい空気が、ただでさえ乏しかった僕のやる気や生命力を、ジワリジワリと削いでいくような気分さえしていたところだった。

「……」

陽平は、回想に入っただまま答えない僕にしびれを切らしたらしい。

「よし、決まりだ。明日の放課後、鷹山市民センターに集合なっ

！あそこ練習室取れっから。市民だと安く借りれるから」

「ええ、そんな！ 待ってくれよ。明日はオケの練習日だし……」

義務感から喰い下がるうとする僕の口の前で、陽平はVサインを出した。

「なんだ、それ」

「二人、だ」

陽平は、なおも真剣な顔つきで、僕に語りかけてくる。

「ちっちゃくて素直な、かわいい系。スレンダーでモデル体型の大人美人系。どちらもそこらの女の子たちとは、ランクが違う」

「だからなんだ、それは」

「明日からの、お前のチームメイトだよ。決まってるだろ？」

陽平は、歯をむき出して笑顔になった。悪戯好きなガキ大将がそのまま大人になったような顔つきだ。

悔しいことに僕はこの瞬間、この悪ガキのこの悪だくみに、まんまと引っ掛かってしまったのである。

「ち、ちなみに、そそ、その子たち、彼氏いるの？」

「はは、お前どもりすぎてんぞ。いねーよ。少なくとも俺が聞いて来た限りではな。お前の頑張り次第なら、彼女にだってなつてくれるかもな。よし、じゃあ明日にはオケ退団してこっち来いよ」

「だからなんでそうなるんだよ！」

その時、

「……あれ、陽平君？」

僕の背後から、鈴を転がすような声が降ってきた。

「おつ、ちあじゃん！」

陽平が、明るい声で僕の背後にあいさつした。

僕が振り返ると、ふわり、いい香りが鼻をくすぐり。

小さな女の子と、目があった。

身長は、多分145あるか無いか。

やわらかなパーマがかかった栗色のショートボブ。清潔そうなストライプのシャツに、太ももの真ん中まで見えてしまうサロペット。適度に肉付きのいい足には、暗い色のニーハイソックスを合わせていて、肌とのコントラストが僕にとって少し刺激が強い。

彼女は、僕を見て、ぱちくりと目を瞬かせると、やがてニコツとほほ笑んだ。

「こんにちは」

ああ、上品な声だ。荒んだ僕の心にはもったいないくらい、優しい声だ。

「ちあちゃん、こいつがこないだ話してた、チューバ。良だ」

「こ、こんにちは。よろしくっ」

僕は、よくわからないままに、一生懸命頭を下げた。女の子の前で挙動不審になつてやしないかと、すごく心配だった。

「こつ、こちらこそよろしくねっ。知識の知に、結晶の晶で知晶つていいいます。みんな、ちあつて呼んでくれてるの」

ちあちゃんも、僕が慌てて頭を下げたせいか、つられてぺこりつ、とお辞儀してくれる。

なんだから、一つ一つのしぐさが小動物みたいで、すごくかわいい。

「ちあは、音楽隊でトランペットを担当してくれるんだ。こんなにちっこいけど、俺たちと同じ年だぜ」

陽平がフォローを入れてくれた。

「もう、陽平君つてば、ちっこいは余計だよう！」

ちあちゃんも、笑いながら返す。その間僕は、顔が赤くなつてし

まわらないか、気が気じゃなかった。女の子の笑顔は、何にも勝る化粧だよ、ホントに。

「明日、こないだんとこで良も合わせて打ち合わせな。衣装とか考えよう」

「わあ、じゃあ明日で全員そろったんだ。楽しみだね、良君！」

ちあちゃんが、いきなり僕の手をぎゅっと握ってきた。

うわあ、小さい。まるで別の生き物の手みたいにあったかくて、白くて柔らかかった。

「う、うん」

思わずうなずいてしまう僕。

ああ、情けない。これじゃあまるでハニートラップに引っかかったみたいだ。

「じゃあ、私次も講義だからいくね。ばいばい、また明日！」

ちあちゃんの後ろ姿は、すぐに雑踏にまぎれて見えなくなってしまう。ううむ、つぶされてしまわないか、心配になってしまう。

「じゃ、明日はよろしくな、リョウくん」

陽平がちあちゃんの口調を真似して、僕にニヤニヤした顔を向けてきた。

「う、うるさい」

僕は照れ隠しに、陽平の頭に軽いチョップを食らわせた。

「いてっ。ま、タダでとは言わないよ、コレ、やるから」

そう言っつて、陽平は僕に、四角い包みを渡してきた。

「なんだ、こ」「CD」

僕がみなまで言い終えないうちに、陽平は言葉をかぶせてくる。

腹いせに、その場で包みを開いてやった。

「何これ」

そのCDのパッケージはかなり異様に見えた。

タキシードをまとった男性が6人、映っている。指揮者を除けば、全員、金管楽器の演奏家のようで、トランペット担当が2人、後の3人はそれぞれホルンとトロンボーンとチューバに割り当てられて

いた。

しかし、それだけで異様と呼べるはずもなく、彼らを異様たらしめているのは、その頭部のかぶり物だった。そう、彼らは皆、別々の動物を模したかぶり物を身につけたまま、正装して楽器や指揮棒を構えているのである。

その様子はさながら、頭部だけが動物の、古代エジプトの半獣神のようにも見える。

「横浜のでっかい動物園、知ってるか？あそこの、イメージキヤラクターたちだ」

知らなかった。

陽平によると、この、一見おかしな格好をした音楽隊　ズイーラシアンプラスというらしい　は、日本でも屈指の若手プロ奏者で構成された金管五重奏なのだとか。

「一度聞いてみるよ。もしかしたら、お前の世界を広げる助けになるかもしれない」

女の子の話をした時と同様に、やけに真剣な顔で陽平は僕に語りかけた。

「う、うん」

思わず、生唾を飲み込みながら返答を返す。

「よっし。じゃ、もう講義行くわ。俺の伝えることは全部言ったから！」

すると、彼はいつの間にか空になっていたカツカレーの皿を持ちあげて、素早く撤収の準備を始めてしまった。

学食では、食べた者が返却口まで皿を片づけるルールなのだ。

「あつ、ずりい！こっちだって次あるんだよ」

かく言う僕のざるそばは、情けないことに、半分も減っていない。しかも、おつゆのお椀には、つけっぱなしにしていた蕎麦が、茶色くなって伸びていた。見るからにしょっぱそうである。

「クックク、後１０分だが、せいぜい遅刻しないよう、頑張ってくれたまえ。バイバイ」

そう言って、陽平はフットワークも軽く、食堂から出て行ってしまふ。僕は、返事もしないでざるそばと格闘を始めた。
くっそう、はめられた……。そう、心の中で呟いた。

1（後書き）

お断りしなくてはいけないことがいくつかありますので、ぜひ読んでいってください。

作中に出てくるズーラシアンブラスには、元ネタになったブラスアンサンブル団があります。

その名も「ズーラシアンブラス」

ばればれですかね。

私は大ファンです。

パフォーマンスも、演奏も一流！　すごいですよねー

たびたび地方公演も行われているようなので、横浜に住んでいないから会えない！なんて思わずに、たまーに新聞のチラシを読んでみるといいかもしれませんよ。

関係者さん、こんなところからですが、勝手に名前を使ってしまつてごめんなさい。

もう一つの話。

私見ですが、ネリベルの交響的断章は、超名曲です

創作の都合上、良君の気持ちを大合奏から離れさせるため、どこかの曲に悪役になってもらう必要がありました。

ならば……現代音楽で、大迫力のこの曲ならば、悪役にしたって、怪傑ゾロのように輝いてくれる！と、勝手に信じての選曲いたしました。

交響的断章は、私が始めて吹奏楽部に入った年の自由曲でした。私はベンチでした。

生まれて初めて耳にした現代音楽で、初めての変拍子だった曲です。

「な、何だこりやああ　　っ!？」ってなったのを、今でも覚えています。でも、何度も聞いているうちに不思議と愛着が湧いてきて、今では超かっこいい!と思っています。

だから、悪意は一切ありませんので、許してね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9896/>

きらめきクインテット！（仮）

2010年10月9日04時10分発行